
聖女様と呼ばないで（仮）

トキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖女様と呼ばないで（仮）

【Nコード】

N0127Z

【作者名】

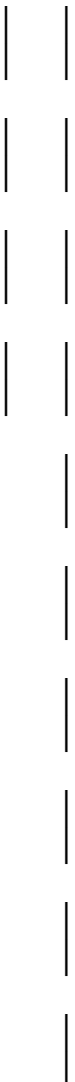
トキ

【あらすじ】

男性が死ぬほど苦手であるということを一番の理由に修道女の道を選んだ少女、コレット。彼女の歌う聖歌は、近隣の村の老人達から「癒される」と大評判だった。それを聞き付けた国王が、彼女を聖女として祀ると決めたものだから大変、連れて行かれた神殿で待っていたのは、聖女を守る騎士三人（全員男性）で——！？

登場人物紹介（イラスト有り）

【 聖女様と呼ばないで（仮） 】 登場人物紹介



【 登場人物紹介 】

> i 3 6 1 3 9 — 9 2 5 <

コレット

15歳。

男性が死ぬほど苦手なことを一番の理由に、修道女として生きる道を選んだが、

あることをきっかけに、聖女に選ばれてしまう。

裁縫や料理は若干苦手で、畑仕事や大作業をしているほうが得意。

> i 3 6 1 4 0 — 9 2 5 <

セドリック

25歳。

ライナグル国の王子。

他人に対して冷たい態度を取る時もあるが、反面、部下には甘い部分もある。

> i 3 6 1 4 1 — 9 2 5 <

ジェイラス

17歳。

通称ジェイ。

口調も性格もラフで、人懐こい。

セドリックに仕えているが、その口調のせいでよくキアランに怒られている。

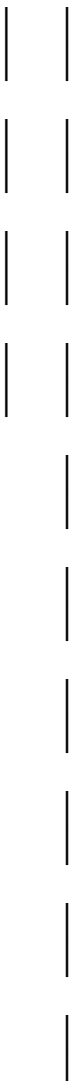
> i 3 6 1 4 2 — 9 2 5 <

キアラン

25歳。

落ち着きがあり、普段は穏やかだが、少々頭が固く礼儀作法などにはうるさい。

セドリックには幼少の頃より仕えている。



『イラスト提供 nicolaさん』

ブログ（前書き）

初めまして、もしくはこんにちは！

拙作に目を留めて下さり、ありがとうございます。

不定期更新になる予定ですが、のんびりお付き合い頂けたら嬉しいです。

プロローグ

たぶん今私が置かれている状況のことを、『窮地』とか『危機』とか言うのだと思う。

広く豪華な部屋の中央に置かれた、これまで目にしたことさえないような天蓋付きのベッドの端に恐る恐る腰かけた私は、緊張に身を固くしていた。

別に、命を取られるとか、そう言った類の話ではない。

ではないけれど、私にとって『それ』は、何よりも恐ろしいもので……。

「——おい、コレット嬢。聞いてるのか!？」

「は、はいいいい!？」

刹那、頭上から降ってきた若干苛立ちが含まれたような声音に、びくりと身体全体を跳ね上げる。

その瞬間、声の主とすっかり目が合ってしまった、慌てて顔ごと逸らした。

肩まで伸ばした淡い金色の髪に、深い碧色の目。均衡の取れた身体に、聖書の中に出てくる聖人のように整った顔立ちの男性。

そう、『彼』が、今私が抱えている最大の問題だった。

なぜなら――。

「聞いていたなら、今俺が話したことを言ってみろ」

身を乗り出し、私の両太腿の脇に手を付いて、彼、セドリックは威圧的に問う。

正面を向けばきつとお互いの鼻の先がぶつかりそうなほど近くまで彼の顔が迫っているのを感じ、私はこれ以上ないほどに身を硬直させ、不自然に首を捻った姿勢のまま早口に答えた。

「自分が修道女であつたことは今日限りで忘れる。ここで俺の指導の下、聖女として相応しい気品と所作、その他諸々を身に付けていってもらふ。いいな？　——おい、コレット嬢、聞してるのか！？」

「……………」

顔を背けていても、彼が目を眇めたのを空気で感じた。どこか間違っていたのかと焦り始めた頃、やっとで彼は私から身を離れた。彼の重みを失ったベッドが軽く弾み、ふわりと身体が浮くような感覚がして、一瞬息を止める。

「最後のは必要ないが……聞いていたならいい」

セドリックは呆れたような口調で言うと、一つ、大きな溜息を洩らす。

私とは言えば、頑なに彼とは全く別の方向に顔を向けたままだ。

「さつきからずっと気になっているんだが、お前、なぜ目を合わせない？　俺と話すのがそんなに嫌か」

「そ、そうじゃな——っ！」

そこまでしか私の言葉は続かなかった。

セドリックの指が私の顎を強く掴み、おそらく醜いほどまで引き攣っていると思われる顔を、彼の方へと強制的に向けたからだ。

「人と話す時は、相手の顔を見る。田舎娘だとは聞いていたが、そ

の上礼儀知らずだとはな」

緊張が最高潮に達し、私の心臓は、今にも破裂してしまいそうだった。

気付いた時には私の腕は電光石火で彼を突き飛ばし、足は窓辺へと一目散に逃げていた。

身に着けた修道服のスカートを握り締めて、限界に達した緊張のあまり身を小さく震わせる。

がくがく震える膝に何とか力を籠め、呆気にとられたように固まっているセドリックに、叫ぶようにして告げた。

それは、私が『修道女』という道を選んだ最大の理由だった。

「ごめつ、ごめんなさい、私、私は、男の人がダメなの、苦手なんです！」

第1話

「私が一体何をしたと言うの……もうやだ、帰りたい」

フカフカのベッドに頭から落ちるようにして身体を放り出し、私は突如自分の身に降りかかった不幸を嘆いていた。

これまで生きた十五年の歳月に起こった出来事で、こんなにも追い詰められたことはなかったと思う。

事の始まりは、いつもと何ら変わらない日の朝に院長様が私に告げた、思いもよらない言葉だった。

「シスター・コレット。あなたは今日、それも今すぐに、ここを出なければいけません」

これに対する私の反応は、大混乱。

瞬間、料理当番だった時に鍋をひっくり返してしまったことや、お祈りの言葉を間違えてしまったこと、それから、修道院を訪れていた小さな女の子のリボンが風に飛ばされて木の枝に引っ掛かり、それを取ろうとして木に登り派手に枝を折ってしまったことなどなど、自分がこれまでに犯した失敗の数々が一気に脳裏を駆け巡った。

けれど、修道院を追い出されてしまうほどの致命的なドジはしていない——はず。

慌てて、嵐にも勝る勢いでこれまでの失敗を懺悔し、引き続き修道院に置いてくれるよう懇願する私の言葉を、院長様は微かに引きつった笑みで遮った。

「違うのです。あなたを追い出そうと言うものではありません。あなたは国王陛下に聖女として認められたのですよ」

「聖、女……？」

まさかの理由だった。

一瞬、目の前が真っ暗になり、心臓が止まった気がした。

なぜ、今になって——と。

けれど、院長様が重ねた理由は、更に思ってもいなかったものだった。

「あなたが歌う聖歌が人々の心を癒すという評判が、国王陛下のお耳にまで届いたのです。国はあなたを聖女と認め、かつて聖人が住んでいた神殿に迎えるとお達しです」

「私の……歌？」

『なんだ、そんなことか』と安堵すると同時に、今度は『や、待つて、なんでそんなことで！？』という疑問と焦りが、瞬間、脳裏を怒涛のごとく駆け巡る。

「ちょ、ちよつと待って下さい、そんなの強引かつ無茶苦茶なこじつけです！ 院長様だつてご存知でしょう、私の歌が人を癒すだなんて大袈裟な……ちよつと村の老人会の人達に褒められてるだけじゃないですか！」

自分で言うのも何だけど、私は修道院での仕事のうちでは料理とかお裁縫とかは少しばかり苦手で、それよりも畑仕事をしたり、大工仕事をしているほうが向いているようだった。

まるで女らしくない私だけど、一つだけ、比較的女らしい特技もあつた。

それは、歌だ。

聖堂に立ち、共に学ぶ修道女達と声を合わせて歌う時、心が震えるような喜びに満たされる。

そんな私の歌を聞いて、村から礼拝に通ってくるお爺さんやお婆さんは、『コレットちゃんの歌を聞くと、本当に癒されるねえ』とか、『持病のリウマチが軽くなったよ』なんて、目を細めて、大袈裟に褒めてくれるのだった。

私は素直にその称賛を喜んで受け取っていた。

とは言え、それが『聖人の奇跡』レベルには足元にも及ばないというくらい、年端もいかない子供にだってわかるはず。

この程度のことです聖女になれてしまうのなら、国はとくに聖人や聖女で溢れ返っていたっておかしくない。

——何はともあれ、私の必死の抵抗は当然あっさりと流され、このような経緯から住み慣れた修道院を去らなければならなかった。

実は院長様は私を氣遣つて告げなかったらしいけれど——と思うけど、本当のところとしては、そのことを私が知ったら逃げると思つたからに違いない——その知らせは七日ほど前に院長様の元に届けられていたらしい。

命じられるままに慌ただしく荷物を纏めて、それから修道院のこじんまりとした中庭に出ると、正面の石造りの門の前に、まるで王侯貴族が乗るような馬車^{かしま}が待ち構えていた。

その周囲には、珍しく姦^{かしま}しい声を上げるシスター達が群がっている。院長様が咳払いをすると、皆慌てて俯き、ばつが悪そうな表情

で自分の仕事へと足早に戻って行った。

彼女達が注目していたのはその馬車ではないということに、近付いてみてすぐに気付いた。馬車の元に、一人の、それも見栄えのする男性が控えていた。

短く整えたクセのない黒髪に、穏やかな琥珀色の瞳。

お城の広間で王様の傍に控えている騎士のような、細身の黒いロングコートを纏っていて、それがまた違和感もなくすんなりと似合ってしまう、そんな人物だった。

彼は待ち人——つまり、院長様と私を迎えると微笑み、もたもたしていた私の手から荷物を素早く受け取る。

そしてこれが、私に課せられた最初の試練だった。

「コレット様、お待ちしてました。私の名は、キアランと申します。貴女を神殿まで安全にお迎えする役目を仰せっております。さあ、どうぞ」

キアランと名乗った彼は、丁重に言って優雅に腰を折り、馬車の扉を開け、まるでお姫様にでもするかのように、私に手を差し出す。苦手な男性を目の前にして、肩を跳ね上げ身を竦めて後退りした私の背を、院長様が容赦なく馬車に押し上げた。

『院長様って、けっこうな年齢に達しているはずなのに、腕力は壮年の男性並みよね』と、シスター仲間が言っていたのが脳裏を過る。

外から閉じられた馬車の扉がまるで鉄格子のように冷たく感じられた私は、子供のようにみつともなく、思わず窓に飛び付いてしまった。

自分の終の棲家になるとばかり信じて疑わなかった赤レンガ造りの小さな建物と友達の姿が、見る間に遠ざかって行く。

その時点で私は既に、まるで地獄に突き落とされたような絶望的な心境に陥っていた。

けれど、それでも神殿に着くまでは、馬車の中も途中で泊まった街道沿いの宿でも院長様と二人きりだったからまだ良かったと、今になって思う。

本当の試練はここからだった。

五日かけて到着した私達を待っていたのは、私を迎えに来たキアランと名乗った彼を含めて三人の男性だった。驚くべきことに、彼らはこれから私の守護役としてずっと神殿に留まるという。

——『聖女と、彼女を守る三人の騎士』。

どうやら国王陛下は、この国に古来から伝わる聖女伝説を、忠実かつ律儀に再現するおつもりらしい。

「信じられない、本当に信じられない。リュウマチを軽くしただけでなんで聖女？ リュウマチがきっかけで聖女って何それ、ないわよそんなの、どんな人生よ」

枕に顔を深く埋めたまま、私は愚痴をこぼし続ける。

息苦しくなってきた頃に、やっとで顔を上げる。そして改めて、自分に与えられた部屋を見渡してみた。

そこは、私が二年間過ごした修道院の宿坊の一室とは、かけ離れた場所だった。

一人で住むには手に余りそうな、食堂並みの広さがある石造りの四角い部屋だ。

天蓋付きのベッドに、私の背の高さほどもある暖炉、高級だと一目で分かる机や椅子に、大きなクローゼットやセンスのいいデザインの鏡が付いたドレッサーなどなど、贅を極めた品々が揃えられている。

そんな中、机の足元に、私がほんの僅かな私物を詰めて持ってきた小さな旅行用トランク——修道院長様に贈って頂いたものだが、肩身狭そうにちょこんと置いてあって、とてつもない違和感を醸し出していた。

「……………」

私はのろのろと身を起こし、呆然と鏡の前に立つ。

くしゃくしゃで皺だらけな黒い修道服を身に着けた、酷い顔色の自分がじつと見つめ返してくる。

溜息を吐いて、ベールを乱雑に取り、跳ねた銀色の髪を指で梳いた。

それから、まるで糸が切れたマリオネットのように椅子に勢いよく身を落とし、両手で顔を覆う。

「落ち着いて、落ち着くのよ、コレット。大丈夫、きっと何とかなる、私が聖女だなんて間違いだったってことになって、すぐに帰れるわ」

自分自身を勇気付けるように、ゆっくり、そしてはっきりと声に出して言う。

何か落ち込みそうなことがあると、いつもこうしてきた。そうすると、不思議なことに本当にどうにかなるような気がして前向きに物事を捉えることができるのだった。

けれど。

今回ばかりは、それも上手くいかないようだった。
それどころか、再びあの緊張の場面が鮮明に蘇る――。

第2話

神殿に着いてすぐ、院長様は私に別れを告げた。

慌てて縋り付いて引き留める私に、彼女はきっぱりと、にべもなく言った。

『あなたのことも心配ですが、残してきたシスター達も日々の務めを怠っていないか心配なのです。私は院長ですから、少しでも早く修道院に戻らなければ』と。

そして無情にも、私はたった一人で、ここに残された。

その後、私はキアランの案内の元、この部屋に通された。私の本音としては、即座に扉に鍵を掛けて永久に閉じこもってしまいたかったけれど、それも許されなかった。

キアランと入れ替わるようにして、また別の人物が私の元を訪れたのだ。

そして……彼が最悪だった。

「お前が“聖女”か」

私の顔を見るなり、彼は冷ややかに言い放つ。その口調は、決してこちらの答えを必要とはしていない、一方的なものだった。

いつもの如く、男性とはまともに目を合わせることもできずに己のつま先を見つめ続ける私に、セドリツクと名乗った彼は、こちらが意見を差し挟む隙も与えずに、言葉の雨を頭上から浴びせる。

緊張に全身を固まらせながらも聞いた話を要約すると、こういうことらしい。

国王陛下は、国の経済政策のために、聖女を祀ることを思い付いた。

とは言っても、この国、ライナグルは決して貧乏国と言うわけではない。

ただ最近、隣のカルヴァート国が相当立派な大聖堂を建てたということで、それに対抗するためとかいう何とも子供じみた……もとい、何とも競争心溢れる理由からだという。

古の伝説の聖女が現れたとなれば、近隣諸国から大勢人が集まり、彼らが落とす路銀や滞在費で国庫も潤うことはほぼ確実だろう——そんな目論みの元、聖女役として相応しい娘を探していた折に私の話が舞い込んだ。

そうして私はここに連れてこられることになった。

国王陛下は、伝説になぞらえ、聖女の傍に従う三人の騎士まで丁寧に揃えていた。

一見、『え、もしかして騎士としての素質じゃなく、見た目重視で選んだの?』と素で思ってしまうほどそれぞれ整った容姿をしているけれど、更に驚いたことに、そのうちの一人は何と国王陛下のご子息、つまりは王子だと言う。それが彼、セドリックだった。

「俺は、お前が本物だとは思っていない。老人のリユウマチを軽減する程度で聖女だなんて、馬鹿馬鹿しいにもほどがある」

それには激しく同意だと声を大にして言いたいところなのに、舌が石のように重く動かない。けれど内心では、彼の言葉に『それなら帰してもらえるかもしれない』と淡い期待を胸に抱いていた。でも、その考えは甘かった。

間を置かずに重ねられた言葉で、すぐに希望は打ち砕かれた。

「だから安心しろ、奇跡を見せろとは言わない。ただそれらしく振る舞え。聖女役を上手く演じられれば、それでいい。俺達も、聖女を守る騎士の役目を演じるつもりだ」

私は、言葉に出さずに、彼の言葉を繰り返す。

『演じる』。

そう、これは結局、国を挙げての壮大なお芝居の計画ということだ。

私は聖女役を演じ、彼らは聖女を守る騎士役を演じる。

……となると、私以外の三人は、やっぱり顔で選ばれたのかもしれない。

なら、聖女役も中途半端な理由で私を選ばないで、顔で決めればよかったのに。

聖女と言えどもっとこう、すらりとした体型の大人の女性で、気品溢れてて、神秘的で儂げな美人で――。

私が頭の中で何を考えているかなど知る由もなく、『騎士その一』のセドリックは淡々と続ける。

「しかし、お前は、子供の頃は母親と森で暮らし、母を失った後は田舎の修道院ですつと暮らしていたと聞いた」

本当ならここでも頷くなり何なりすべきなのかもしれないけど、首が思うように動いてくれない。

「と言うことは、だ。おそらく、聖女らしくと言われたところで、

どうしたら良いのかすらわからないだろう」

この瞬間に顔を上げることができたなら、世の中の女性達が一目で心を奪われそうな端正な顔が意地悪くもせせら笑っているという世にも残念な決定的瞬間をきつと目撃したことだろう。

——や、あくまでも、口調からの推測でしかないけれど。

「自分が修道女であったことは今日限りで忘れろ。ここで俺の指導の下、聖女として相應しい気品と所作、その他諸々を身に付けていってもらう。いいな？」

私は微塵も身動きすることなく、その命令が耳に虚ろに響くのを俯いてただ感じていた。

……これから、どうしよう？

私は、物心ついた時には既に男性が苦手になっていた。自分でもよく分らないけれど、彼らを目の前にするだけで緊張してしまい、顔は赤らみ、舌が固まり、うまく話すことができなくなってしまいう。小さな子や、お爺さんなどは普通に接することができるのに、なぜか同年代から壮年の男性は、どんな人でもだめだった。

そのせいもあって、私は唯一の身寄りだった母を失った後は、迷うことなく女子修道院の門を叩いた。

規律の厳しさに始めは慣れなかったりもしたけれど、予想通りに、そこは私にとって居心地の良い住まいとなった。

あの静かな修道院で淡々と生活していられればそれだけで満足だった。

なのに——。

「——おい、コレット嬢。聞いているのか!？」

頭上から降ってきた叱責の声に、現実引き戻される。

そして強引に彼の方へと顔を向けさせられた私は、自国の王子を突き飛ばすと言う、自分でも信じられない暴挙に出てしまったのだった。

これに当然のことながらセドリックは怒った様子で、無言で部屋を出て行ってしまった。

その後の私と言えば、自分の不甲斐なさ境遇を嘆き、ずっと枕に顔を沈めていたのだった。

「あああ、私の馬鹿」

既にしてしまったことをいくら悔やんだところでどうしようもないけれど、そうは思ってもやっぱり悔やまずにはいられない。

顔を覆っていた両手をゆっくり下ろし、再び鏡の中の自分と目が合った、その刹那。

何の前触れもなく礼儀正しく扉を叩く音が響いて、私は思わず息を止め身を竦めてしまう。

「コレット様？」

躊躇^{ためら}いがちに私を呼んだのは、女性の声だった。

それに気付くやいなや、私は急いで扉に飛び付いて訪問者を迎え入れる。

「良かった、ここにも女の人がいるのね!？」

勢い余って抱き付きかねない私の様子に、私とほぼ同い年くらい

に見える彼女は、大きな目を真ん丸にして驚いた。

けれどそれも一瞬のことで、すぐに自分の役目を思い出したようだった。

軽く両膝を曲げて腰を落として挨拶し、屈託なく微笑む。

「キヤスと申します。コレット様の身のお世話の役目を仰せつかっております」

女の人がいたことに喜びを隠せなかったけれど、『コレット様』という呼び掛けと、上流階級の間人相手にするような対応にひどく落ち着かない気分になり、私は思わず眉尻を下げる。

「ええと、キヤス、つまりあなたはこれから、私のここでの生活を手助けしてくれるってことよね？ それならお願い、コレット様なんて呼ばないで。私は、そんな特別な者じゃないわ、単なる修道女で」

「まあ！ まだそのような服装でいらしたんですね。すぐにお着替えを用意しなくては。そろそろ夕食の時間でございますから」

私の言葉をキヤスは早口に遮り、まるで修道服を生まれて初めて目にしたとでも言うように、まじまじと眺める。

「夕食？ この服装ではだめなの？」

彼女には色々と話したいことや聞きたいことがたくさんあったけれど、夕食と服装にどのような関係があるのかいまいち掴めず、反射的にそう返していた。

修道院に入る前も修道院でも、食事のためにわざわざ着替えをすることなどなかった。

「ええ、もちろんです。そのような質素な服装でセドリック様達とお食事をされるなど、もつての外です」

「え、セドリック……様と！？　って言うか、達！？　達って、まさか……いえ、私は一人でいい、この部屋で、パンとミルクがあれば十分だから！」

それにキヤスは『ご冗談を』と笑うけれど、冗談ではない。むしろこちらが『ご冗談を』と笑いたい。

私の青筋には全く気付かないキヤスは、クローゼットを開け、ぎつしり詰まった華やかでヒラヒラした服のうちの一つを手にとって広げて見せる。

淡い空色の絹の生地、レースや刺繍を施した、まるで結婚式で花嫁が身に着けるような豪華なドレスだった。違うことと言ったら、色くらいだと思う。

「コレット様には、こちらがお似合いになると思いますよ」

「って、ちょ、何それウェディングドレス！？　夕食よね、単なる夕食よね！？」

そして私は、こちらの意見など全く聞く耳なしのキヤスによって強引に修道服を剥ぎ取られ——彼女もまた院長様と同じく、見た目に寄らず馬鹿力だった——、食事にはおおよそ不向きなドレスを着せられ、おまけにこれまでしたことなどない化粧まで施されて、与えられた自分の部屋から追い出されたのだった。

第3話

これもまた今まで見たこともないような華やかなダイニングルームに、重い静寂が満ちている。

この部屋にいるのは、たった四人だった。数人見かけた使用人らしき人達は、料理を出すとすぐに扉の向こうへと消えた。

どことなく気まずい空気が流れる夕食の、おかしくなりに広いテーブル。私はその端に着いて、ナイフとフォークを手に、ただただ目の前の料理に視線を落としている。

修道院での食事に比べると、天と地ほども差がある豪勢なものはあったけれど、だからと言って一心不乱に眺め続けるほどの興味が皿の上にあったわけじゃない。

前を――厳密に言えば、テーブルに着いた顔ぶれを見ることができないためだ。

私の正面には『騎士その一』、そして左右にそれぞれ一人ずつ、『騎士その二』、『その三』である彼らが座っている。

顔を上げていれば、いつか誰かしらと目を合わせることになるのは必至だった。あと他に見る場所と言ったら、天井くらいしかない。そんなわけで私は、消去法で唯一残った手元を食いいるように見つめ続けている。

「コレット様、部屋に不満などありませんか？」

その場の沈黙を破ったのは、『騎士その二』――キアランの柔らかい声だった。三人の中ではまだ、何となく、本当にわずかにだけど話やすそうな彼に、私はどうにか目を向ける。

「え、ええ、大丈夫。私には贅沢過ぎるくらいだわ」

それにキアランは満足げに『良かった』と言い、微笑んだ。

「コレットは男嫌いなんだって？」

何の前置きもなく唐突に訊ねられ、私は口元に運んだ水のグラスを落としそうになってしまう。

この神殿に到着して初めて顔を合わせた時の記憶を、緊張のためにうまく働かない頭から、必死に引っ張り出す。

にこにこした笑みでこちらを見ている『騎士その三』の、長く伸ばした赤い髪が特徴的な彼は、そう、確か、ジェイラスという名だった。

彼は私と一番近い年齢で十七歳だと、私に手際よくドレスを着せる間にキアスが話していた。彼女はもうやら相当なお喋り好きらしく、手と同様に舌が止まることもなかった。

そんなわけで、キアランとセドリックは二十五であることも（聞いてないけど）教えてくれた。

ちなみに、彼女がキアランの名を口にする時は、必ず蕩けるような眼差しになる。

まあ、気持ちとは分からなくもない。男性が苦手で修道女という道を選んだ私だけど、そういう感情を否定するわけではない。

キアランは、セドリックと違って口調も物腰も柔らかいし、優しいし、笑顔もとても素敵だと私だっている。だから、きっとすごく女の子に人気があるんじゃないかな。

——それはさておき。
頭を、今に切り替える。

完全に大人の男性の雰囲気を身に纏っているキアランやセドリッ
クに比べ、ジェイラスは、微かにまだ少年の面影を残しているよう
に感じた。

それは年齢的な見た目の問題ではなく、軽い口調や所作といった
もののせいなのかもしれない。

私はテーブルに戻したグラスを意味もなく両手で支えたまま、言
葉を必死に探した。

「あ、あの、えっと、それは」

「いやー、セドリック様がぶすーっとしてたものだから、何があつ
たのか聞いたら、男は嫌いだったって、張り倒されたって」

「ジェイ！」

咎めるようにすかさず声を上げたのは、セドリックだった。

真っ直ぐ見ることができずに伏せた睫越しに彼の顔色を窺うと、
微かに顔が赤くなっているような気がする。

ジェイラスは『わかった』とでも言うようにセドリックに愛想笑
いを見せて見せてから、再び私に向き直った。

「で、どうなの？ やっぱり女子修道院とかにずっといると、男嫌
いになっちゃうもんなのか？」

言いながらも、グレーの明るい目も、それに口元も、心底楽しそ
うに笑っている。今しがたセドリックに怒られかけたことなど、既
にきれいさっぱり忘れているようだった。

「そ、そうじゃなくて、私は、もともとで……その、男の人と話す
ことが少なかったっていうのもあるかもしれないけど」

「へえ。でもさ、男だからってなんで？ 男も女も、同じ人間だろ
？」

矢継ぎ早の問いかけに、私の頭は混乱し、パニック寸前だった。

確かに、彼の言うとおりだ。男だって女だって、同じ人間であることには変わらない。

……なのになぜ、私はこんなにも緊張してしまうの？

言葉に詰まる私を見かねたらしいキアランが、助け船を出してくれた。

「ジェイラス、あまりレディを困らせるようなことを言うものじゃない」

「レディってな……。キアラン、その相変わらずの堅苦しい騎士道精神っての？ とうにかなんねえの？」

「お前こそ、もう少し礼儀作法を身に着けたらどうなんだ。だいたい、いくらセドリック様がお許し下さるとは言え、王太子殿下に対する態度というものだって」

この二人は、もしかしたらいつもこんな感じで言い争いをしているのかもしれない。放っておいたら永遠に続きそうなキアランの小言を、セドリックの良く通る声が遮った。

「とにかく！ こうも緊張されては、聖女としての役目云々以前の問題だ、話にならない」

一気にその場の全員の視線が私に集まり、思わず椅子の背もたれに背中を貼り付かせてしまう。

そんな私を人差し指で示し、セドリックは、目を細めて告げる。

「いいか、コレット嬢、何が何でもその男嫌いを克服してもらおう。

そのためには、常に、俺達の誰かと行動しろ」

「ええッ！ 常に……！？」

「ああ、うん、それがいいかもな。習うより慣れろってやつだ」

「常に……！？」

「そうですね、長い時間を共に過ごせば、自然と肩の力も抜けるかもしれませんね」

「常に……！？」

「くどいぞ、コレット嬢」

動揺を隠せない私に、セドリックが腕を組んでぴしゃりと言いつつ。

身に纏った空気で一瞬に人を黙らせるその圧倒的な雰囲気、私はふと、ある人物を思い出していた。

——院長様だ。男性版院長様だ。や、見た目は全然違うけど。

私が頭の中で何を考えているかなど知る由もないキアランが、すっかり大人しくなった私に微笑んだ。

「では、明日の朝はわたしが神殿を案内します。これからはここがコレット様の家となるのですから、色々と知っておいて損はないでしょう」

「じゃあ、俺はその後で近くの街に連れてってやるよ。ここら辺は果物ぎつしり詰め込んだタルトと、あとワインが名物でさ、すっげえ旨いんだぜ」

キアランに続いたジェイラスの提案には、セドリックが眉根を寄せる。

「おい、ジェイ、初っ端^{しょはな}から遊び歩かせてどうする」

「ええー、ダメっすか？ 夜に行くよりは健全でいいと思いますけど。ってか、もしかしてアレですか、セドリック様、自分が連れて行きたいとか？」

「馬鹿を言っな。子守りは神殿の中だけで十分だ」

「子もっ……！？」

その言葉には、さすがに反論しなくなってしまふ。

もし舌が滑らかに動けば、土砂降りの通り雨のように、異論をぶちまけたことだろう。

それと同時に、なぜセドリックが私を『コレット嬢』と呼ぶのか理解した。彼にとつて私は、修道女でも聖女でもなく、所詮『田舎育ちの小娘』でしかないのだ。

二十五歳からしたら十も離れている私は子供にしか見えないのかもしれないけど、それにしても『子守り』だなんて――。

「とにかく外出はだめだ、今後一切禁止とする。これから“聖女”として振る舞ってもらおうというのに、一般庶民のように外をふらついて見せてどうする。そんな聖女、俺は嫌だ、説得力がまるでない」

組んだ腕を崩さず、横暴な口調で言い放つ。

――『嫌だ』って、ちょ、自分の好みの問題！？ あとついでに、それって世間一般では監禁って言わない！？

内心ではすかさず突っ込んでいた私だったけれど、意義を申し立てようにも口が動かなくてはどのようなもない。

キアランも、そしてジェイラスでさえも、どうやらセドリックに逆らおうという考えは一切ないらしい。彼の自己満足とも思える命

令に、驚くほどあっさりと頷いた。

そして同時に私は、ある決意を胸に抱いていた。

どうにかして、早いうちにここから逃げ出そう、と。

第3話（後書き）

書き溜めてあったものをアップし終わったので、これから先は更新が時間かかるかもしれません、すみませんm（| | ;）m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0127z/>

聖女様と呼ばないで（仮）

2011年12月4日03時46分発行